

キーツ、シェイクスピア、ワーズワスの「想像力」の比較考察 Relative Consideration of the 'Imagination' of Keats, Shakespeare and Wordsworth

高波 優

TAKANAMI Masaru

I would like to discuss John Keats, William Shakespeare and William Wordsworth and compare their ideas of 'imagination'. "Ode on a Grecian Urn" and *Othello* have certain features in common. The common link is 'visionary imagination'. This 'imagination' is different from the 'naturalized imagination' that William Wordsworth had. Dr. Kuniyoshi Ueda created *Noh Othello* also which expressed 'visionary imagination'. Throughout the course of this essay, I evaluated the essence of the 'imagination' in Romanticism.

1. はじめに

私がテーマとして取り上げたのは、キーツの詩「ギリシャ古壺のうた」¹の次の部分である。

Heard Melodies are sweet, but those unheard are sweeter;² ...

(耳にひびく音楽は美しい、だが 耳にひびかぬ音楽はことさらに美しい。・・・)³

これは、キーツの「想像力」を非常に分かりやすく表現している部分である。その理由は後述するとして、その意味は、耳に聞こえる音は物理的な音であるが、耳に聞こえない音は、心に響く音であり、より強いインパクトを与えるということである。

また、この詩を見ると、シェイクスピアの代表作『オセロー』⁴のデズデモーナとオセローを想起する。オセローはイアーゴの謀略により、騙され、デズデモーナを不義の疑

いで殺してしまう。殺した後に、騙されたことを知るが、時は遅くデズデモーナの肉声を聞くことはできない。そこで、嘆くオセローは自ら命を絶ってしまう。

オセローは、デズデモーナの肉声を聞くことはできなかったが、耳に聞こえない声を聞いたのである。このように考えると、『オセロー』における「想像力」とキーツの「想像力」は共通したものがある。

そこで、本論では、この2つの部分を取り上げ、両者の「想像力」を比較し、さらにワーズワスの「想像力」と比較し、ロマン派「想像力」の本質の一面を探る。

2. 「想像力」に関する比較考察

2 - 1 . キーツの「想像力」

「1. はじめに」でも取り上げたが、ここで、もう一度取り上げる。

Heard melodies are sweet, but those unheard
 Are sweeter; therefore, ye soft pipes, play on;
 Not to the sensual ear, but, more endeared,
 Pipe to the spirit ditties of no tone:
 Fair youth, beneath the trees, thou canst not leave;
 Thy song, nor ever can those trees be bare;
 Bold Lover, never, never canst thou kiss,
 Though winning near the goal - yet, do not grieve:
 She cannot fade, though thou hast not thy bliss,
 For ever wilt thou love, and she be fair!¹⁵

(耳にひびく音楽は美しい、だが 耳にひびかぬ音楽は
 ことさらに美しい。さあ、その静かな笛を、吹いておくれ。
 人の耳にではなく、もっとしんみりと
 靈魂に、音のない歌を 吹きならしておくれ。
 美しい若者よ、おまえは この木々の下に、おまえの歌を
 やめることができぬ。木々はまた 永遠にその葉を落とすこともない。

大胆な恋人よ、おまえは とてとても接吻はできぬ、
もう一息のところだけど - 嘆いてはならぬ。
おまえの幸せがとどかなくとも、彼女は萎れはしない。
おまえが永遠に愛しておれば 彼女もまた 永遠に美しい！)(出口保夫)

この「ギリシャ古壺のうた」は、1819年の5月に書かれたものであり、彼がファニー・ブローンと出会い、幸せな日々を送る中で書かれた。この詩は壺に話し掛けるという形で始まっており、現実世界から、壺の「想像力」の世界に入り、また、現実世界に戻るという構成をとっている。‘Heard melodies ...’は、壺の中の「想像力」の世界に入った後の部分であり、壺に描かれている人や物に関心に移り、それらについて「想像力」を働かせて描いている部分である。その描かれているものの中に笛がある。その笛が奏でる音に「想像力」を働かせているのである。

この部分を理解するのに、『キーツ 光の旅 - 詩神に捧げられた魂』⁶で、安藤幸江は、キーツの次の手紙が役立つだろうと言っている。それは、1818年12月31日、キーツが弟のジョージ夫妻に宛てたジャーナル・レターである。この中で、キーツは、ピサのキャンポ・サントのフレスコ画について次のように言っている。

... ‘even finer to me than more accomplish’d works - as there was left so much room for Imagination’⁷ ...

(「完成された作品よりも僕にとって素晴らしいのは、想像力を働かせる余地のあるものだ」)(安藤幸江)

つまり、未完成の作品の方が、「想像力」によって素晴らしいものになるのであり、音楽も一緒に、耳に聞こえない音楽の方が「想像力」によって自分なりにいくらでも美しくすることができるということである。ここには、足りないものを「想像力」で補い、より素晴らしいものにするという発想がある。

また、さきほど引用した最後の部分、「若者が接吻しようとしてもできない、でも彼女は永遠に美しい」というところも、「届きそうで届かない愛、届かないからこそ、より彼女が美しく感じられる」という逆転の発想がある。つまり、届かない愛だからこそ、「想像力」

によって彼女の美しさがより引き立つのである。それは、「徹底的な否定の中に探り当てられた肯定」という発想であり、キーツの「想像力」の根底をなすものである。

2 - 2 . シェイクスピアの想像力

今まで、キーツの「想像力」について見てきたが、シェイクスピアはどうか。これを考える為に、『オセロー』の次の部分を取り上げる。

「冷たい、冷たい、デズデモーナ、お前の肌は！貞潔だったお前の心さながら。」⁸

これは、自分の勘違いで殺してしまった妻を前にして、オセローが嘆いている場面である。死んだ後も美しい妻の肌を目にして、それが生前の妻の心のようにと想像しているのである。しかし、デズデモーナは死んでしまっており、妻の心は確かめようがない。しかし、オセローの「想像力」によって、妻の心はより一層美しいものになっている。

ここには、キーツの「想像力」と同じ、「徹底的な否定の中に探り当てられた肯定」というものが存在する。いくら叫んでもデズデモーナは帰ってこない。もう手遅れである。だからこそ、デズデモーナの心の美しさは、オセローの心の中で大きく膨れ上がる。

宗片邦義氏は、『日英二ヶ国語による「能・オセロー」創作の研究』の中で、次のように述べている。

「死」というものは、人と人を引き離すものではなくて、むしろ二人の関係を速めたり、強めたりするものではないでしょうか。実は、これが今日の「能・オセロー」のテーマなのです。⁹

宗片邦義氏は、「能・オセロー」で、デズデモーナを亡霊として再生させ、オセローと会わせるということを経験しているが、この「能・オセロー」こそ、オセローの「想像力」そのものである。「死」によってオセローの想像力は大きく働き、デズデモーナを亡霊として心に再生した。そして、そこには美しい心を持ったデズデモーナがいるのである。そこで、二人の絆は固く結ばれる。まさに、「死」によって「想像力」が働き、二人の関係は強められるのである。

このように考えると、「能・オセロー」は、日本の能という伝統文化を取り入れながら、

シェイクスピアの理想とする「想像力」を体現した作品だと言える。

2 3 . キーツの「想像力」とシェイクスピアの「想像力」の比較

以上、キーツの「想像力」とシェイクスピアの「想像力」を見てきた。そこには、両者ともに、「徹底的な否定の中に探り当てられた肯定」という発想があり、否定の中にこそ、「想像力」が働く余地があるという考えが存在することが分かった。では、ロマン派の他の詩人はどうだったのか。そこで、ワーズワスを例に取って、キーツ及びシェイクスピアと比較する。

2 - 4 . ワーズワスの「想像力」

ワーズワスの「想像力」を考えるために、『キーツ論考 自己解体としての想像力』¹⁰ の次の部分に注目する。

スティリンガー¹¹ はロマン派の「想像力」は、二つの型に大別することができるという。一つは彼が 'naturalized imagination' と呼ぶ所のものであり、ワーズワスのように、「想像力」があくまでも日常体験の世界を離れず、「見えるがままに」見ることによって、それを全く別なものに変形する。もう一つの型は、'visionary imagination' と呼ぶところのものであり、ブレイクやシェリのように、日常体験の世界とは違った、この世を超えた、より高い領域、目に見えない世界を洞察するものである。¹²

この目に見えない世界を洞察したのが、キーツであり、シェイクスピアであったのに対し、ワーズワスの想像力は、目に見える世界での「想像力」であると言っているのである。この点について、ワーズワスは『抒情民謡集』の序文(1815年版補遺)で次のように述べている。

...the appropriate business of poetry ...and her duty, is to treat of things not as they are, but they appear ; not as they exist in themselves, but as they seem to exist to the sense and to the passion.¹³

彼はものの真実にこだわらず、彼の感覚と情熱に「そう見える」ことが大事だとした。

いずれにしても、キーツやシェイクスピアのような、「見えない」世界は対象としていなかったのである。つまり、ワーズワスの「想像力」の本質は、「見えない」ものを補い膨らませていくものではなく、あくまで「見える」ものを膨らませていくものだったのである。そこには、「徹底的な否定の中に探り当てられた肯定」という発想は存在しない。この点にキーツやシェイクスピアの「想像力」とは異なるものが存在する。この「見える」か「見えない」という事が、先述した「能・オセロー」における「想像力」にも関係するので、それについて次に少し触れる。

2 - 5 .「能・オセロー」における「想像力」

『オセロー』の原文では、デズデモーナは再生しない。ただ、オセローの心の中に「想像」されるだけである。「能・オセロー」はそれを目に見える「能」という形で表現したと先述した。これは、「見えない世界」に「想像力」を働かせたシェイクスピアと一見矛盾するように見える。しかし、ここで考えたいのは「能・オセロー」が「能」という形態を取っている点である。これが、演劇やミュージカルという形態であったらどうであろうか。「見えない世界」を「見える世界」に変えてしまうのであるから、「想像力」を働かせる余地が無くなってしまおうと考えても不思議ではない。「想像力」を補おうと視覚化した瞬間、そこには「想像力」を働かせる余地が無くなってしまおうという危険性をはらんでいる。これは、本論中で、キーツの詩に関する部分で述べたことでもある。しかし、「能」は演劇やミュージカルと違って、「精神の世界」を表現するものであり、見るものは常に「想像力」を働かせなければならない。「想像力」を働かせる事ができた者のみ、その「精神世界」を理解することができるのである。また、逆に、それがわかりにくさを産み出し、一般大衆になじみにくいものとしているのも事実である。しかし、だからこそ、「能・オセロー」はシェイクスピアの「想像力」を失ってはいないのである。「能・オセロー」が「能」という形態を取ったからこそ、シェイクスピアの「想像力」を保つ事ができたのだと私は考える。

このように考えると、「能・オセロー」の「想像力」は「見えるがままに」見る、'naturalized imagination'ではなく、「見えない世界」を洞察する 'visionary imagination' と言えるのである。

2 - 6 .ロマン派詩人の「想像力」と現実の我々との関連性

我々が生活する中でも、手に入れるまでは、一生懸命になるが、手に入った瞬間さめて

しまうということが良くある。手に入りそうで入らない時こそ、そのものが美しく輝くということは我々にも起こることである。そこには、「想像力」という魔法がかけられているのである。しかし、現代は何でも手に入る時代であり、この「想像力」を働かせる機会が無い。そして、目に見えるものだけを信用する。まさにワーズワスの感覚である。

「想像力」の欠如により、我々は「真の喜び」を失いつつあると言える。キーツ的な感覚からすれば、我々が、この喜びを取り戻すためには、あえて否定的な状況の中に身を置かねばならないという‘irony’を経なければならぬが、このロマン派詩人達の「想像力」は、我々に「喜びを持って生きる為のヒント」を与えてくれているのである。

3. 結論

以上、キーツとシェイクスピア、ワーズワスの「想像力」について比較考察した。本論の結論は次の通りとなる。

キーツとシェイクスピアの「想像力」は「徹底的な否定の中に探り当てられた肯定」という発想があり、否定の中にこそ、「想像力」が働く余地があるという考えが存在する。また、これは、「見えない」世界を補い膨らませていく「想像力」であった。これに対して、ワーズワスの「想像力」は「見える」ものを膨らませていく想像力であり、「徹底的な否定の中に探り当てられた肯定」という発想は存在しない。ロマン派の想像力はこの2つに大別でき、我々に喜びを持って生きる為のヒントを与えてくれている。

以上が結論である。また、本論でも触れたが、「能」という日本の伝統文化が、ロマン派詩人の「想像力」と根底で繋がるという事は驚くべきことであり、両文化の奥深さを物語るものと言える。そして、「能・オセロー」はその「想像力」という点での繋がりを見事に表現した作品と言えるのである。そして「能・オセロー」を見る事は、現代人が失いつつある「想像力」を取り戻すきっかけになると私は考える。

【参考文献】

- 宗片邦義著 *Keats' Love Letters* (キーツ恋愛書簡集) 北星堂書店 1971.2 初版
 John Keats, *John Keats Selected Poems* (Penguin Classics, 1999)
 安藤幸江著 『キーツ 光の旅 - 詩神に捧げられた魂』 北星堂 1998.6 初版
 宗片邦義著 『日英二ヶ国語による「能・オセロー」創作の研究』 勉誠社 1998.2 初版
 阪田勝三著 『キーツ論考 自己解体としての想像力』 南雲堂 1982.3 2刷
 John Keats 著 出口保夫訳 『キーツ詩集』 1996.9 新装版第 8 刷発行
 シェイクスピア著 福田訳 『オセロー』 新潮文庫 平成 13 年 6 月 第 51 刷
 川口・岡本共編 『最新文学批評用語辞典』 研究社 1996
 笠原勝朗著 『最新イギリス文学史年表 翻訳書・研究書記』 こびあん書房 1995
 上田勤他編 『20 世紀英米文学ハンドブック』 南雲堂 1977

註

-
- 1 “Ode on a Grecian Urn” (1820)
 2 *John Keats Selected Poems*, p.168
 3 『キーツ詩集』 p.17
 4 William Shakespeare, *Othello*
 5 *John Keats Selected Poems*, p.168
 6 安藤幸江著 『キーツ 光の旅 - 詩神に捧げられた魂』 北星堂 1998.6 初版
 7 H.E.Rollins, ,19
 8 『オセロー』 p.179
 9 『日英二ヶ国語による「能・オセロー」創作の研究』 p.44
 10 阪田勝三著 『キーツ論考 自己解体としての想像力』 南雲堂 1982.3 2刷
 11 Jack Stillinger; *The Hoodwinking of Madeline and Other Essays on Keats's Poems* (Illinois U.P., 1971) pp.124-5
 12 『キーツ論考 自己解体としての想像力』 p.57
 13 E.de Selincourt, ed.; *The Poetical Works of William Wordsworth* , p.410